Osaka University Knowledge Archive

Title	近代文人としての芥川龍之介 : 芸術と風流の間で
Author(s)	髙橋, 奈保子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47103
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【23】

氏　　名	髙　橋（大庭）奈保子（たか はし（おおば）なほこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２０７９４　号
学位授与年月日	平成 19 年３月 23 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**近代文人としての芥川龍之介－芸術と風流の間で**
論文審査委員	（主査） 教　授　上倉　庸敬 （副査） 教　授　大橋　良介　　教　授　藤田　治彦　　助教授　内田　次信

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、大正期から昭和初年に活動した小説家・芥川龍之介（1892～1927）を「近代文人」と位置づけ、その独自な様相を明らかにして、これまで省みられなかった側面から、芥川の文学を把えなおそうという試みである。横A4 判で縦書、本文 105 頁に参考文献表と参考図版を付し全 139 頁。１頁 39 行で１行 40 文字だから、400 字詰め原稿用紙に換算すれば本文は約 410 枚である。

本文の構成は「序章　問題概念『近代文人』と芥川」、「第一章　芥川の文人趣味・風流観」、「第二章　芥川の詩書画論」、「第三章　芥川の俳句・墨書・墨画」、「結章　近代文人としての芥川龍之介――芸術と風流の間で」から成る。

明治の開国以来、日本における文人のありようは、和漢の教養に洋の文化が混淆して大きく変容し、「近代文人」という新たな概念が成立した。芥川龍之介もその一人である。ただし、和漢洋の文化に立脚した諸芸術を、他の近代文人が本業に付随した余技ないし気楽な道楽と考えていたのに対し、芥川はそれを風流と称んで、本業の小説創作と切り離せない活動と見なしている。風流心はそのまま芸術精神につながっている。それが可能になったのは、旧態依然たる文人墨客の風流を拒否して、俗流の東洋趣味を排除したからである。

芥川の母には、江戸文化の伝統に根ざした風流の血が流れている。父は山口県の農村から維新後に東京へ出て、牛乳販売という実業で成功した。母方／父方、都会／田舎、伝統／革新という対立項は、落伍者たる風流人／成功者たる実業家という対立項を逆転の支点にして、芥川内面の錯綜したパラダイムを形成する。生い立ちに由来するこうしたダブルバインドの葛藤をのりこえるために、芥川は風流に関して、ある風流を否定し、ある風流を肯定する二重の構えをととのえ、そこから独自の風流観を構築しなければならなかった。

「近代文人」芥川龍之介の風流は、芸術に展開しなければ已まぬものでありながら、その背後に、否定されるべき自己を潜めている。自己否定の契機を孕みつつ、芥川の芸術と風流の関係はたえざる緊張に曝されつづけている。そうした緊張のなかで風流は「芸術的涅槃」であり「清浄なるデカダンス」と規定されるが、その「風流」概念の範囲内で、人間精神と一体化すべき自然は、「清浄な自然」と理想化されて、「死への想念」をたえず呼び起こしていた。

風流と芸術の関係がしめす連続と緊張を考察した「東洋詩的精神」論は、小説創作に結実するより先、現実において「デカダンな清浄」を実現してしまった。芥川龍之介という独自な近代文人にあって、芸術と風流のあいだに張られた緊張は、「東洋詩的精神」の向こうにあるものを追い求めることができないほど、すでにバランスを失っていたのである。

論文審査の結果の要旨

芥川龍之介はおそらく夏目漱石に次いで厖大な数の論攷が書かれている作家であるが、本論文は対象に向かう態度がユニークである。芥川において東西の文化が融合しているという視点のアプローチは、比較文学の方法をもちいて、英・仏・独・露といった西方の文化から芥川を照らしだすことが多い。しかし本論文は、同じ視点に立ちながらも、芥川を近代文人と規定して、東方文化から光をあてている。従来、文人たる側面は芥川の周縁と見なされるだけだったが、本論文は芥川の文人性を真っ正面から取りあげて論じている。

本論文は近代文人の研究であるから詩書画を論じる。文芸学および美学の方法によって、作品を中心にすえ理論と思想背景をさぐる論理展開は、従来の文学研究では踏み込みにくい芥川龍之介の位相を明らかにして、みごとな成果を生んでいる。近代の風流人芥川が提示されるにとどまらず、近代日本という、いくつかの異文化を摂取し混淆して、生成・変容してきた重層する文化の場を解きあかしてもいるのである。

本論文は大学生・芥川の受講ノートを綿密にひもとき、旧蔵書のアンダーライン箇所を丁寧に読み解いて、大正期における新カント派やクローチェをはじめとする美学受容の程度また象徴主義やバトラー、イエーツなどの芸術受容の状況までも指摘することができた。文献を博捜し個人蔵の墨書画を発掘して調査する手際には、論者が生誕百年記念の展覧会『もうひとりの芥川龍之介展』を企画・推進したときの、学芸員としての経験と見識が存分に生かされている。

逆にいえば、従来どおりな文学研究の方法を意識して控えたため、芸術家・芥川に本来の、小説作品を分析し解釈する部分がいくぶん薄手になってしまった。先行研究を引用して済ませ、論者独自の解釈を提出しようという積極性に乏しい憾みが残る。

本論文の結論を芥川の小説研究に生かす考察は、むしろ今後の論者に期待すべきものであろう。本論文は、その優れた着眼、方法、論理展開、結論によって、博士（文学）の学位に十分ふさわしいと認定する。